

幻想的な世界観を楽しむ本

明るくてコミカルな本もいいけれど、ときには仄暗さや影のある作品はいかがでしょうか。今回は、幻想的な世界観や非日常に没入できる本をご紹介します。

1冊目は、ヒグチユウコ/作『すきになったら』です。

すきな人ができたら、その人の好きなものや大事にしていることを知りたくなったり、その人と同じものを身につけたくなったり、「すき」のかたちは人それぞれ。これは、恋をしたときの「嬉しい」や「もどかしい」などの心の揺れや感情の機微を、少女のモノログでつづった「愛」がテーマの絵本です。ページをめくるにつれ、距離が近くなり見える景色が広がっていく様子を、画家・ヒグチユウコ氏が繊細な筆致で描いています。また、お話を締めくくる“すきになったら わたしの いちぶは あなたになる”という一文はとても印象的で、恋愛感情や興味関心の多様性に富むなかで、共感できる人も多いのではないのでしょうか。作者による独特の世界観が心地よい、大人にも読んでほしい絵本です。

2冊目は、清水大輔/著『幻想店舗録』です。

魔法使いの館、中世ヨーロッパの酒場、サーカスの天幕、スチームパンクな隠れ家など、本書ではファンタジー世界に迷い込んだような、日本国内に実在する幻想的なお店を紹介しています。フリーランスの写真家として活動している著者は、海外を旅して遺跡や世界遺産を撮り歩いていましたが、コロナ禍を機に、国内で車中泊をしながら独創的で内装の凝った喫茶店や読書館を見て回るようになったそうです。そこで出会ったお店の個性や情熱に魅了され生まれたこの写真集には、香川県内のカフェやアンティークショップも掲載されています。眺めているだけでもワクワクするような一冊です。また、世界の古都や夜市の写真を収めた前作『異世界に一番近い場所』も見応えがあるので、ぜひ併せてご覧ください。

3冊目は、斜線堂有紀/著『本の背骨が最後に残る』です。

一冊の本が刻める物語は原則一つまで。食い違った物語を宿す本があれば、その『誤植』を正すため、互いに火が焚かれた鉄格子に入り『版重ね』という舌戦を交えなければならぬ。版重ねの勝敗が決すると、誤植持ちの本には『焚書』が待っており…。

この小説の舞台は、火にくべられた書物の代わりに「本」と呼ばれる人間が口伝で物語を語り継いでいる、紙の本が禁じられた小国です。ビブリアマニアの著者が創り出す不気味で蠱惑的な世界観は残酷ながらもどこか美しく、特にダークファンタジー好きの読者には刺さる展開です。読み終わったとき、表題の意味がわかるとその儚さに胸を打たれます。

今日ご紹介した本の他にも、怪奇幻想作家が文を紡ぐ絵本や、ライトアップが美しい工場夜景の写真集などもあります。秋の夜長に、幻想的な世界観に浸ってみませんか。